

中国語と日本語の音声の比較

——中国語学習者の発音とヒヤリングの指導のために——

朱 新 建

0. はじめに

第二外国語としての中国語の習得は、漢字圏の日本人学生は読解力は生れつきながら優れているが、それに比べて会話力や聴解力はかなり劣っている。拙稿は中国語と日本語の音声と比較し、両言語の相違点を明らかにすると同時に、学習者の問題点を分析して、母語利用法を提起し、効果的な中国語の発音とヒヤリングの指導法を確立するために役立てようとする試みを、未熟ながら下記のように述べることとする。

なお、拙稿で言う中国語とは中国各民族間共通の言葉である「普通話」のことであり、日本語とは東京語を母体とする共通語のことである。音声表記は IPA によった。

1. 中国語と日本語の音声の比較

現代の中国語各方言の音声は、長い歴史を経て、いろいろ変化してきた。特に現代中国語の音声の標準音となる北京方言の音声は、他の方言よりも濁音（有声音）から清音（無声音）への変化及びアクセント、即ち「声調」

の変化が著しい。⁽¹⁾ 筆者の方言である永州方言には下記のような有声音がある。

破裂音：	[b]：	[laubo]	老婆(女房)	[bazian]	罰錢(罰金)
	[d]：	[debie]	特別(格別)	[datau]	達到(到達)
後部齒茎摩擦音：	[ʒ]：	[ʒɪpen]	日本(日本)	[ʒɪʒan]	治安(治安)
軟口蓋摩擦音：	[ʁ]：	[ʁeɛin]	核心(核心)	[ʁobin]	和平(平和)
齒茎摩擦音：	[z]：	[zɪtian]	詞典(辭典)	[zɪʒin]	事情(用事)

このような有声音は呉方言⁽²⁾にも見られるが、北京方言には存在しない。一方、北京方言の声調には四つのタイプ、いわゆる四声しかないが、呉方言の七声をはじめ、南昌方言が六声、広東方言が九声であり、いずれも北京方言より声調の種類が多い。厦門方言の場合、「本調」(Basic Form)と「変調」(Sandhi Form)を合わせると十四声⁽³⁾ある。

一方、日本語の音声は呉音や漢音、唐音などと言われているように、中国語の漢字音に大きく影響されたことが分かる。中国語は日本語と言語体系こそ異なるが、音声は似ているところがかかなり多く、日本人学生にとっては親しみのある言葉であり、習得しやすい言葉であると言えるであろう。

1.1. 母音

中国語の母音と日本語の母音を下記のように示す。日本語の長母音は中国語にないので下記から外す。なお、表記は中国語の場合はローマ字のピンインで、日本語の場合は片仮名で表記する。()は音節の始めに来る際の表記である。/ /は音素で、[]はそれぞれの音声と条件異音である。

中国語	日本語
〈母音音素〉 /i, ʏ, a, o, u, ũ/	/i, e, a, o, u/
〈単母音〉 i(yi) : [i], [ɪ], [ɨ]	イ : [i]
e : [ɤ], [ə], [e], [ɛ]	エ : [e]
a : [a], [ɑ]	ア : [a]

o : [o]	オ : [o]
u (wu) : [u]	ウ : [u], [ũ]
ü (yu) : [y]	
〈二重母音〉 ai : [aĩ] ei : [eĩ] ao : [aũ] ou : [oũ]	ヤ : [ĩa] ュ : [ĩu]
ya : [ĩa] ye : [ĩe] wa : [ũa] wo : [ũo]	ヨ : [ĩo] ワ : [ũa]
yue : [ỹe]	ヲ : [ũo] アイ : [aĩ]
	オイ : [oĩ] ウイ : [uĩ]
〈三重母音〉 yao : [ĩaũ] you : [ĩou] wai : [ũaĩ]	
wei : [ũeĩ]	
〈そり舌母音〉 ir : [ər] er : [ɣr] ar : [ar]	
〈そり舌化母音〉 aor : [aor] our : [our]	
angr : [ār] engr : [ər]	

1.1.1. 単母音

上記に示してあるように、単母音は中国語は6つあり、日本語は5つある中、[a]、[o] が一番似ている。[i]、[e] も似ているが、[ɣ]、[ə]、[u]、[y] などが日本語にない。中国語の [i] の条件異音である [ɿ] は日本語のスとツの母音である [ũ] と調音感覚では非常によく似ている。ここでは中国語と日本語の個々の母音の記述は避けて、両者の相違を中心に見ていく。

[i] [i] は前舌狭母音であるが、日本語の [i] は非平唇であるのに対し、中国語の [i] は口唇が積極的に左右に引かれている平唇母音である。

[ɿ] と [ɿ] [ɿ] と [ɿ] は [i] の自由異音であるが、[ɿ] は歯茎音の [ts] と [tsʰ]、[s] の後にしか現れず、[ɿ] はそり舌音の [tɕ]、[tɕʰ] と [s]、[ʒ] の後にしか現れない。[ɿ] は日本語のスとツの母音である [ũ] と非常に似ている。

[ɣ] [ɣ] の母音は日本語にない。聴覚印象では日本語の [o] に似て

いるが、[o] は円唇であるのに対し、[ɤ] は左右横に引く非平唇である。

[ə] [ə] は [ɤ] の条件異音であり、後に鼻音の [n] と [ŋ] が来るときに [ɤ] が [ə] になる。日本語の [e] より開口が広く、舌位が後よりである。

[e] [e] は [ɤ] の条件異音であり、後に [i] が来る時に [ei] になり、[ɤ] は [e] になる。日本語の [e] に近い発音である。

[ɛ] [ɛ] は [i] や [y] の後に来るときの [ɤ] の異音である。日本語の [e] よりはやや広い。

[a] [a] は日本語の [a] よりやや開口が広い。

[ɑ] [ɑ] は [a] の条件異音であり、後に鼻音 [ŋ] が来るときの発音である。日本語の「案外 あんがい」[anɡai] の「あ」[ɑ] が似ている。

[o] [o] は聴覚印象では日本語の [o] によく似ている。口唇の形は日本語の [o] より突き出している。

[u] 日本語のウの [u] は非円唇で非平唇の前よりの奥舌狭母音であるのに対して、中国語の [u] は円唇の後よりの奥舌狭母音である。口唇の形は [o] よりも突き出て、唇をまるく小さくすぼめて発音する点に特徴がある。

[y] [y] は円唇の [i] である。口唇の形は [u] と同じであるが、舌位は [i] である。日本語のウは歌などで強く発音されると、[y] に聞こえることがある。

上述のように、全体的に見れば、中国語の母音は日本語の母音より舌位は前舌と奥舌の幅が大きく、口唇の開きは積極的であり、変化に富んでいる。

1.1.2. 二重母音と三重母音

二重母音 (diphthong) と三重母音 (triphthong) については服部四郎⁽⁵⁾ 1984 を引用すると下記ようになる。

「連続した二つの母音で同一音節中にあるものを二重母音という。普通一方が音節主音で他方が副音である。音節副音の方はわたり音が普通で、かつ短いことが多い。」

「(1)降り二重母音。最も普通のもので、主音の次に副音が来る二重母音。日本語（東京方言など）の二重母音はすべてこれで、しかも副音は [i] に限る。たとえば、[kai]（会）、[koi]（鯉）、[kuī]（杵）。その他の母音連続は普通、二音節に発音される。たとえば、[ie]（家）、[ue]（上）、[ao]（青）、[kau]（買う）。」

「(2)昇り二重母音。副音の次に主音がくるもの。……シナ語（北京）の [kōaŋ]（光）などにも昇り二重母音が聞かれる。」

「三重母音とは、連続した三つの母音で同一音節中にあるものをいう。……普通、主音が中央にありその前後に副音がある。シナ語（北京）の「遠」は [y̥ōaŋ] のように三重母音を以て発音されることがある。」

このように、日本語には三重母音はないものの、二重母音は存在していることがわかる。

しかし、上記服部の [ai]、[oi]、[ui] のような日本語の二重母音は話し言葉の中では同一音節中にあるもののように聞こえるにしても、下記の場合みたいに、普通日本語では二拍であると認めているように、台詞や歌などの中では二拍で、二音節になって現れるため、「一音節中にあるもの」であるとは言いがたい（アンダーラインの箇所）。

ドラマによくある台詞：「あ・い・し・て・る！」 [a·i·ei·te·ru]

『北国の春』の一節：♪レ ソ ソ ミソミレ ドド レミソ

き せ つ が と か い で は

[ki se tū ga toka i de ūa]

これに対し、中国語は漢字を造語の単位とし、1 漢字 = 1 音節であり、音節言語であると言われているように、無論、中国語の二重母音や三重母音は同一音節中のみのものである。

しかし、中国語の二重母音と全く同質のものは日本語にも存在する。例えば、下記のような外来語に見ることができる（アンダーラインの箇所）。

名詞 フィルム [fɯĩrumɯ] ツァー [t͡ʃa:] チェス [t͡ʃesɯ]

カンツォーネ [kant͡ʃo:ne]

人名 ジェシカ・ラング [d͡ʒiesika·rangɯ]

ウィレム・デーフォー [ɯĩremɯ·de:ɸũo:]

アーノルト・シュワルツェネグァー [a:noruto·ɕɯʌrɯt͡ʃenega:]

このほか、考え方を考えてみれば、「ヤ、ユ、ヨ」と「ワ、ヲ（[ũo]と発音する場合のみ。以下同）」や拗音の母音も立派な二重母音である。今まで日本語の音声学では「ヤ、ユ、ヨ、ワ、ヲ」などを二重母音として認めていないのは、[i] と [u] を子音化の半母音 [j]、[w] と見ているからである。しかし、「ヤ [ĩa]、ユ [ĩu]、ヨ [ĩo]、ワ [ũa]、ヲ [ũo]」などは下記のように、聴覚印象では中国語の二重母音と区別がつかないほどよく似ている。

日本語	中国語	
や [ĩa]	ya [ĩa]	(鴨)
ゆ [ĩu]	you [ĩoũ]	(優)
よ [ĩo]	yo [ĩo]	(囃)
わ [ũa]	wa [ũa]	(蛙)
を [ũo]	wo [ũo]	(倭)
ちゃ [t͡ʃa'ĩa]	qia [t͡ʃa'ĩa]	(恰)
ちゅ [t͡ʃa'ĩu]	qiu [t͡ʃa'ĩu]	(秋)
しゃ [ɕʰa'ĩa]	xia [ɕʰa'ĩa]	(蝦)
しゅ [ɕʰa'ĩu]	xiu [ɕʰa'ĩu]	(修)

上述の中国語の母音と日本語の母音を付図Ⅰの「中国語と日本語の音声の比較図」の図Ⅱのように表すことができる。

1.1.3. そり舌音とそり舌化音 (r 化音)

そり舌母音は中国語の音声の特徴のひとつである。下記のように、そり舌母音の表記は普通、その母音の後に [r] を付ける。この [r] はただ前の母音がそり舌音であるための表記であり、実際の発音はしない（以下同じ）。そり舌化 [retroflexion] 音の母音 (r 化音ともいう) の表記も同じである。そり舌母音を一概に [ə] で表記する論説もあるが、拙稿ではそり舌化母音の特徴も反映させるために、すべてのそり舌母音を [r] つけて表記する。

erbi [ɣrpi] 耳鼻 (耳と鼻) ertong [ɣrt'ug] 兒童 (兒童)

huar [xuar] 花兒 (お花) kongr [k'ūr] 空兒 (暇)

アメリカの英語では、bird [bæ:d] (鳥)、here [hiə] (ここ) の [ə] のように、そり舌母音が見られるが、日本語にはそり舌母音が見当たらない。

1.2. 子音

中国語の子音と日本語の子音は下記のように示すことができる。

A 群 中国語: [p, p', t, t', k, k', ts, ts', tɕ, tɕ', s, ɕ]

日本語: [b, p, d, t, g, k, dz, ts, tɕ, tɕ', s, z, ɕ, ʒ]

B 群 中国語: [f, x, m, n, ɲ, ɳ, l, tɕʰ, tɕʰ', ʂ, ʐ]

日本語: [ɸ, h, m, n, ɲ, ɳ, r]

上記のように、中国語の子音と日本語の子音を A 群と B 群に分けることができる。A 群は調音法に違いが見られ、B 群は調音点に違いが見られる。

A 群では、中国語は有気と無気の対立が有意義であるのに対して、日本語は有声と無声の対立が有意義である。すなわち、中国語では無声の無気音を有声音のように発音されても意味の区別に問題がないということである。例えば、da [ta] (打) を [da] のように発音しても構わない。こ

れには個人差があるが、北京方言話者が普通、無声の無気音を有声音のように発音しないが、他の方言話者が「普通話」を話すときに無声の無気音を有声音のように発音することがある。一方、有声と無声の対立をなす言語ではたいてい無声の有気音と無気音が存在するように、日本語にも有気音と無気音があるが、中国語とは逆に、日本語では無声音を有気音（普通語頭に多い）か無気音（普通語中に多い）かのどちらかを発音しても意味の区別に支障がないのである。そこで、いかに日本語の中の有気音と無気音を自覚し、これを利用して中国語の有気音と無気音を習得するかはポイントであろう。

B 群では、[f, x, l] 及びそり舌音の [tʂ, tʂ', s, ʒ] のような音声は日本語にはない。下記のようにその特徴を示しておく。

[f] [f] は上の前歯と下唇で調音される唇歯音であるが、上の前歯で下の唇を噛むように閉鎖を作り、口腔にためた息を勢いよく出して発音するのがポイントである。日本語のフの子音 [ɸ] は聴覚印象ではすこし似ているが、調音点が異なる両唇音であるほか、口腔から息を出すのも弱い。

[x] [x] は軟口蓋と奥舌面で閉鎖を作り、肺から強い息を出して生じる摩擦音である。日本語の声門音 [h] はよく似ているが、中国語の [x] は調音点が声門より前の軟口蓋にあるのと、強い摩擦音が聞こえる点が違う。

[l] [l] は上の前歯と舌尖で閉鎖を作り、息が舌の両側から流れ出ると同時に声を出す有声の側面音である。日本語の弾き音 [r] は息が舌の両側からではなく、舌の上から流れ出る点が違うのと、舌尖が弾く点が違う。中国語の [l] を発音するとき、舌尖が上の前歯の歯茎の裏、硬口蓋の近くへ反って舌の裏面と歯茎の裏で強い閉鎖を作って調音するのがポイントである。

[tʂ] と [tʂ'] [tʂ] と [tʂ'] は無声のそり舌の破擦音である。まず舌尖を硬口蓋へ反って、舌尖の裏面と歯茎の裏面で閉鎖を作り、この閉鎖を

破って破裂すると同時に摩擦を生じる音である。日本語には歯茎の破擦音はあるが、そり舌音はない。

[s] と [ʒ] [s] と [ʒ] はそり舌の摩擦音である。[s] は無声音であるのに対し、[ʒ] はその有声音である。舌尖が硬口蓋へ反って舌の裏面と歯茎の裏面で閉鎖を作って調音される音。

このほかに、両唇音の調音は、中国語では、両唇による閉鎖が非常に強く、口腔の気圧も高いのに対し、日本語では両唇の閉鎖の力が非常に弱く、口腔の気圧も低い。そして鼻音の [n] と [ŋ] は音節末子音として現れるのは日本語にも見られるが、「lan [lan] 蘭、lang [lan] 狼」のように、中国語では弁別素性をもっているのに対し、日本語では語尾の [n] と [ŋ] は意味の区別に役立たない。

中国語の子音と日本語の子音を「中国語と日本語の音声の比較図」の図Ⅰの通りで示すことができる。

1.3. アクセント

城生佰太郎 1988 に従うと、中国語のような、一音節内でピッチ変動を有するタイプのアクセントを「声調アクセント」といい、日本語のような、同一音節内で原則として高低変化を生じないタイプのアクセントを「音調アクセント」という。⁽⁶⁾ 言い換えれば、中国語と日本語のアクセントの最大の相違点は、中国語も日本語もピッチ・アクセントである点が共通しているが、一音節内で高低の変化があるかないかが違うところである。

中国語の声調については専門の論著を参照されたい。上述のように、中国語も日本語もピッチ・アクセントである点は共通のところであるが、日本語のアクセントはピッチ・アクセントであることは事実である。しかし、中国語のアクセントはピッチ・アクセントであると同時に、ストレス・アクセント⁽⁷⁾でもある。ただ、中国語の声調においては、ピッチは弁別的であり、ストレスは非弁別的である。中国語の四声のストレスは、音節内部で

ピッチの変動をする際、同じ声調の場合、母音の開口の度合により、狭→広の順で音強が増幅する。一方、軽声は必ず四声と組み合わせ⁽⁸⁾てはじめて成立するものであるが、四声と軽声の間には⁽⁸⁾滝がで⁽⁸⁾き、日本語の音調アクセントに最も似ている部分である。

したがって、中国語の声調アクセントの習得については、ただ単に声調の高低昇降だけの指導をするのではなく、声調のストレス的な部分も指導すべきである。このように、言語の非弁別的な部分は往々にしてその言語のらしさでもあるのである。

2. 日本人学習者の問題点

日本人学習者が初めて中国語の音声⁽⁹⁾を習得する際にどんな問題点が出てくるかは、前述の中国語と日本語の音声の比較から大体の予測はできるであろう。ここでは、3 か月間で約24時間前後中国語を第二外国語として習った学生を対象にヒヤリングのテストを行った結果を分析し、学生の学習の成果とまだ存在している問題を確認してみることにする。

テストの問題は選択の方式で、学生の問題点を予測して出した。○をうっている問題は正解である。テストは教室で教師が正解の問題を3回発音し、学生が正解だと思う問題に○をうつ。このようなテストはすでに3回ほど行った。

[ヒヤリング・テスト] 全体の正答率合計：75%

問題：発音を聞いて、発音された単語に○をつけなさい。

クラスA：(55人の内、男51、女4)

- ①. fóshān 3. dōngxī 5. fǎnwèn ⑦. bàngōng 9. tóngzhì
2. héshān ④. dōngxi ⑥. fǎngwèn 8. bànkōng ⑩. tóngzhì

正答数：55 55 42 33 54

正答率：100% 100% 76% 60% 98%

クラスB：(55人の内、男42、女7、留6)

1. jiěshí 3. rénshēn 5. huánghé ⑦. bèiyīn ⑨. guójí

②. jiěshi ④. rénsēng ⑥. fànhe 8. pèiyīn 10. guójì

正答数：55 41 46 23 42

正答率：100% 75% 84% 42% 76%

クラスC：(52人の内、男43、女6)

1. mǎtóu 3. rénmin 5. nóngli ⑦. fùlì 9. xīfàn

②. mǎtou ④. rénmíng ⑥. nénglì 8. hùlì ⑩. shīfàn

正答数：51 28 34 43 25

正答率：98% 54% 65% 83% 48%

クラスD：(56人の内、男40、女9、留7)

①. kāifā ③. fùlì ⑤. dúshū ⑦. jiàoshī 9. zhōngshí

2. kāihuā 4. hùlì 6. túshū 5. jiàoshì ⑩. zhòngshì

正答数：45 40 48 49 53

正答率：80% 71% 86% 88% 95%

クラスE：(54人の内、男45、女9)

①. tóugǎo ③. guójí ⑤. zìshā 7. chūrù ⑨. fēiji

2. tóukǎo 4. guǒjì 6. cìshā ⑧. chūlù 10. hēiji

正答数：43 42 31 33 47

正答率：80% 78% 57% 61% 87%

クラスF：(47人の内、男35、女12)

1. jīguān ③. fābào 5. zhídào 7. shíyán ⑨. fūrén

②. jīguāng 4. fāpào ⑥. chídào ⑧. shíyàn 10. hūrén

正答数：30 27 18 36 35

正答率：64% 57% 38% 77% 74%

上記のテストの正答率の結果を分類してみると下記ようになる。

(1)四声の弁別問題：

A 9/⑩/98%、B ⑨/10/76%、D ⑦/8/88%、E ③/4/78%、
F 7/⑧/77% 正答率合計：83%

(2)軽声の弁別の問題：

A 3/④/100%、B 1/②/100%、C 1/②/98% 正答率合計：99%

(3)有気音と無気音の弁別の問題：

b/p [p/p'] : B ⑦/8/42%、F ③/4/57%
d/t [t/t'] : D ⑤/6/86%
g/k [k/k'] : A ⑦/8/60%
z/c [ts/ts'] : E ⑤/6/57%
zh/ch [tʃ/tʃ'] : F 5/⑥/38% 正答率合計：68%

(4)側面音とそり舌音の弁別の問題：

l/r [l/z] : E 7/⑧ 正答率：61%

(5)唇歯音と軟口蓋音の弁別の問題：

f/h [f/x] : A ①/2/100%、B 5/⑥/84%、C ⑦/8/83%、D ①/2/80%、
E ⑨/10/87%、F ⑨/10/74% 正答率合計：85%

(6)円唇母音と非平唇母音の弁別問題：

ong/eng [uŋ/ɛŋ] : C 5/⑥ 正答率：65%

(7)音節末歯茎鼻音と軟口蓋鼻音の弁別の問題：

n/ng [n/ŋ] : A ⑦/8/60%、B 3/④/75%、C 3/④/54%
正答率合計：63%

上記のテストの結果を見るかぎり、全体の正答率合計75%に達しており、学生の努力ぶりが伺える。特に、(1)と(2)の声調の問題は予想したより遙か良い結果であった。中国語の声調は実際の学習ではかなり習得が難しいが、ヒヤリングでは意外に良くできる。これは、中国語の声調はピッチアクセ

ントであると同時に、ストレスアクセントでもあるので、そのストレスの部分の習得は困難のようである。一方、ヒヤリングのテストでは2つの単語の選択なので、ピッチの違いで十分弁別できたであろう。特に(2)の軽声の問題ではほとんど完璧にできたのは、中国語の軽声は日本語のアクセントに一番よく似ているのも要因のひとつであろう。

(3)の有気音と無気音の弁別の問題では、全体的に正答率が低いのは有気音と無気音の習得の難しさを物語っている。特にそり舌音の有気と無気の区別が一番難しかったようである。日本語にも有気音と無気音が存在しているが、弁別素性を有しないことから、有気音と無気音に対する自覚が薄く、24時間前後の学習では不十分であろう。

(4)と(5)は日本語にない発音の弁別の問題であるが、結果は決して悪くはない。特に唇歯音の [f] と軟口蓋音の [x] は発音の練習で学生達は苦勞した。

(7)は音節末の [n] と [ŋ] の違いを弁別する問題であるが、これも日本語に存在する音声でありながら、結局有気音と無気音の場合と同じように、違う音である自覚がないため、難しい発音ではないにもかかわらず、良い結果につながっていない。

(6)は円唇母音と非平唇母音の弁別の問題であるが、音節末鼻音が後続しているため、やや難しい問題であった。

以上はヒヤリング・テストの結果だけを分析して、日本人学習者の問題点を見てきたが、決して完全なものではない。このほかに、二重母音や三重母音の発音も問題点のひとつであることは予測できる。しかし、これらの問題点は、日本人学習者にとってはすべて困難点では決していない。前述の中国語と日本語の音声の比較で分かるように、日本語にない発音は僅かしかないし、調音点や調音法が似ているものが圧倒的に多い。問題はいかに学習者に自分自身の母語の音声を自覚させるかと、中国語の音声と日本語の音声の相違点を充分弁えさせて、あとは母語の音声を利用しての効果

的な発音とヒヤリングの指導をするのみである。

3. 母語利用法と発音・ヒヤリングの指導

外国語の習得についてよく問題にしているのは母語の干渉である。拙稿ではむしろ母語の干渉を積極的な要素のひとつであるにとらえて、中国語の習得に「母語利用法 Using Mother Tongue Method」を提起し、効果的な中国語の指導法を目指したい。

3.1. 母語の干渉と母語の利用

母語の干渉の主な原因は、外国語や第二言語を習得する際に、学習者が自分自身の母語の対象言語に似ている発音や語彙、文法などをもってくるため、対象言語の習得に妨げとなる。そこで、中間的な発音や中間言語のような現象が生じる。例えば、娘が6才のとき来日し、名古屋に着いた次の日が小学校の入学式ですぐ小学生となった。日本語は3か月経って話すようになったが、家庭では中国語と日本語混じりの会話だった。そのときから「電気をつける」という日本語を「電気をあける」と言っていた。中国語では「開電灯」と言うからである。今小学校5年生の娘はもはや中国語の会話ができなくなり、すっかり日本語っ子になった。なんとか中国語を「再習得」させようと、ふだん週に数時間中国語を教えるほか、今年の夏に、家族で1か月近く北京で夏休みを過ごした。娘が中国語をすこし話すようになったと思ったら、今度はお母さんの「快点睡覺！」（早くねなさい！）に対して、「媽媽也快点覺睡嘛！」（母さんも早くねてよ）のように言って、中国語のほうの述語と目的語の語順を日本語のように反対に言うのである。

一方、日本人の中国語学習者の場合、下記などのように中国語のピンイ

ンのローマ字を日本語のローマ字のように読んだり、英語のように読んだりする現象がある。

q → k qu [tɕ'y] 去 (行く) → [ku] 哭 (泣く)

c → k cai [ts'ai] 菜 (料理) → [kai] 蓋 (蓋)

しかし、これはあくまでも学習者がまだ母語と対象言語との相違と区別が分からないから起こした間違いであって、むしろ自分の知っている知識を利用して学習しているのである。

こうした学習者の積極的な一面を生かして、日本語の中に数多くの漢語があって、中国語の理解に非常に都合良く利用できるように、中国語の音声に似ている母語の発音や余剰的特徴⁽⁹⁾を利用して、中国語の音声⁽⁹⁾を習得することができると考えている。

3.2. 中国語の発音とヒヤリングの指導

日本人学習者のための中国語の発音とヒヤリングの指導は、母語を利用した指導法は効率的で、効果的であると考えているが、指導の際、学習者に母語の音声体系を自覚させることと、母語と習得する対象言語の音声との相違点を明らかにし、常に念頭におきながら母語を利用して習得していくようにするのが大事である。

拙稿は具体的な指導法や練習問題などについて別の機会で述べたいが、ヒヤリングの指導については尹景春 1994、「听力教学」(聴解の指導)⁽¹⁰⁾をすこしご紹介する。

尹 1994 によると、日本人学生が中国語を聞くと、「音→漢字化→意味」といったように、中国語の音を聞いて漢字化し、それから意味を理解するという「語音文字化」(言語音の文字化)の現象があると述べている。尹の調査によると、197名の学習者(大学生)のうち、中国語の音を聞いて中国語の漢字に転換して理解するのは57.4%で、日本語の漢字に転換するのは16.2%、任意に中国語と日本語の漢字のどっちかに転換するのは

25.9%、音を聞いて直接意味を理解するのは0.5%であった。そこで、日本人学習者の中国語の聴解力を上げるのに日本語の中の、中国語と同形の漢字を利用するのが効率的で、効果的であると尹は主張している。

上述のように、外国語や第二言語の習得は母語の干渉は避けて通れない問題であり、母語の干渉を排除するような消極的な指導法よりは、母語の利用という積極的な指導法は学ぶ側にとっても、教える側にとっても、効率的で、効果的な指導法であるとして、これから更に研究を深めていきたい。

注

- (1) 藤原輝三、1968『中国語のアクセントと日本語のアクセント』一般教育研究、第16巻第4号を参照されたい。
- (2) 中国語各方言の記述については、袁家驊・他著、1960.2『漢語方言概要』（文字改革出版社）を参照されたい。
- (3) 朱新建、1994「厦門語と日本語のアクセントに関する一考察」（愛知学院大学教養部紀要第42巻第1号）を参照されたい。
- (4) 円唇、平唇、非平唇については、城生佰太郎著、1988.4『音声学』（アポロン音楽工業株式会社）p. 36を参照されたい。
- (5) 服部四郎、1984.6『音声学』第151頁。
- (6) 城生佰太郎、1988.4『音声学』第103頁。
- (7) 中国語の声調のストレス的な部分の研究については呉宗済・他編『実験語音学概要』第230頁等を参照されたい。
- (8) 声調の軽声について別紙・付の周同春 1990 の図48、50を引用する。この図のピッチ線で四声と軽声との間にできる「滝」がわかるほか、四声がもつストレスの強度も分かる。
- (9) 杉田泰史、1994.10「日本中国語学会第44回全国大会研究発表要旨：『有気音』に含まれる摩擦的要素——教授法のための一提案」を参照されたい。
- (10) 尹景春、1994.10「対日漢語初級教学的諸問題——听力教学」。日本中国語学会第44回全国大会口頭発表。（日本中国語学会第44回全国大会は1994.10.15～16、

名古屋大学に於いて開催された。)

参考文献

- 袁家驊・他著、1960.2『漢語方言概要』文字改革出版社
服部四郎著、1984.6『音声学』岩波書店
城生佰太郎著、1988.4『音声学』アポロン音楽工業株式会社
呉宗濟・他編、1989.1『実験語音学概要』高等教育出版社
周同春著、1990.10『漢語語音学』北京師範大学出版社
林焘・王理嘉著、1992.11『語音学教程』北京大学出版社
土岐哲・林史典・他著、1993.5『日本語要説』ひつじ書房

付図 I

中国語と日本語の音声の比較図

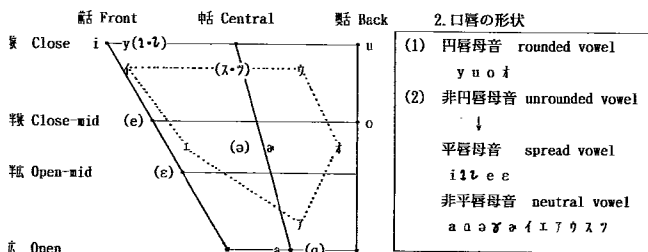
図1. 子音

調音点 Point of A.	両唇音 Bilabial		唇歯音 Labiodental		歯茎音 Alveolar		歯茎硬口蓋音 Alveolar-Pa.		そり舌音 Retroflex		硬口蓋音 Palatal		軟口蓋音 Velar		声門音 Glottal	
語別 Types of A.	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日	中	日
破裂音	有聲	(b)	b		(d)	d							(g)	g		
裂音	無聲	p	p		t	t							k	k		
音聲	有氣	p'	(p')		t'	(t')							k'	(k')		
Plosive	綴	b-p			d-t								g-k			
摩擦音	有聲				(dz)	dz	(dʒ)	dʒ	(dʒ)							
擦音	無聲				ts	ts	tʃ	tʃ	tʃ							
音聲	有氣				ts'	(ts')	tʃ'	(tʃ')	tʃ'							
Affricate	綴				z-c		j-q		zh-ch							
摩擦音	有聲					z		ʒ	ʒ							
擦音	無聲		f		s	s	ʃ	ʃ	ʃ			ç	x			h
Fricative	綴		f		s		x		r-sh				h			
鼻音		m	m		n	n					ɲ	ɲ	ŋ	ŋ		
Nasal	綴				n								ng			
弾き音						r										
Tap or Flap																
側面音					l											
Lateral	綴				l											

注: 1. A. = articulation 2. Pa. = palatal 3. 破線の () の音声は自由異音である。 4. ' は有気音を表す。

5. 表記=中国語のローマ字表記のピンインである。

図1.1. 母音



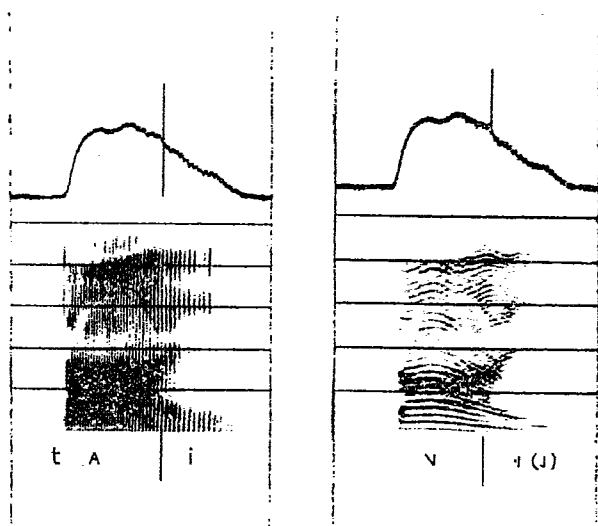
注: 1. 実線の i y a o u y ə は中国語の母音, () は条件異音である。ə はそり舌母音である。

2. 破線の i e i o は日本語の母音。(ス・ツ) はス・ツの母音 [ü] 。

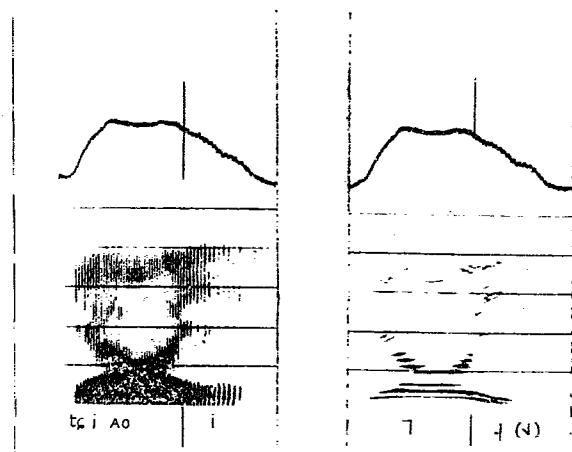
3. 音声表記は IPA (revised to 1989) によった。

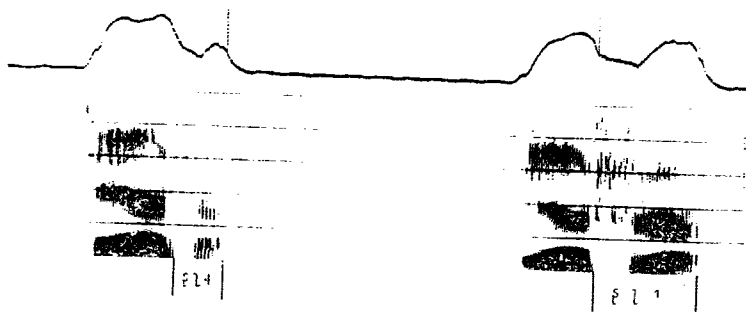
4. 口唇の形状は城生佑太郎 (1988) 『音声学』 (図4-2) によった。

付图 II

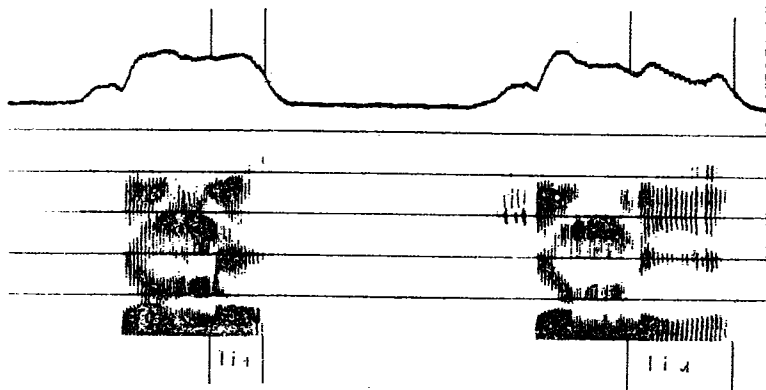
“大意 [a⁵¹ i³²]”

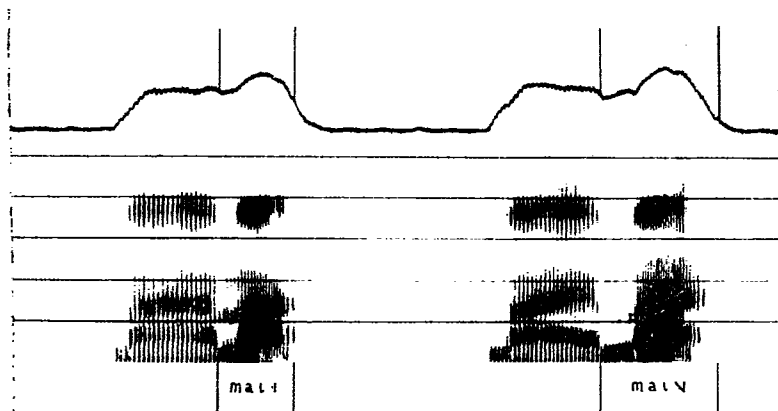
图四十八：北京音“轻声”图例（一）

“交易 [tɕiɑo⁵⁵ i³²]”

1. “结实 [tɕiɛ⁵⁵ ʂ³²]”“结实 [tɕiɛ⁵⁵ ʂ³⁵]”

图五十：北京音“轻声”与非“轻声”对比图例

2. “行李 [ɕiŋ³⁵ li³²]”“行礼 [ɕiŋ³⁵ li²¹⁴]”

3. “买卖 [mai²¹ mai³]”“买卖 [mai²¹ mai⁵¹]”4. “运气 [yn⁵¹ tɕʰi³²]”“运气 [yn⁵¹ tɕʰi⁵¹]”